

「春の訪れ」展によせて

梅と文学と絵画 — 林逋と孟浩然に注目して —

梅は中国原産で、主に東アジアに生育しています。場所や品種にもよりますが、2月頃が梅の花の見頃です。暦では春を迎える時期ですが、まだ寒さが厳しい中に咲くことから、「百花の魁(さきがけ)」とも言われます。東洋においては、文人・高士の愛する花としてのイメージがありますが、このイメージを高めたのが、北宋時代前期の林逋(967~1028)の梅の詩です。林逋は生涯仕官せず、西湖のほとりの孤山で静かに暮らしたといわれています。没後に皇帝から贈られた和靖先生の諡より、林和靖の呼称でもよく知られています。林逋の代表的な詩として名高いのが、以下に記す「山園小梅」(二首其一)です。

衆芳揺落独暄妍
占尽風情向小園
疎影橫斜水清淺
暗香浮動月黃昏
霜禽欲下先偷眼
粉蝶如知合斷魂
幸有微吟可相狎
不須檀板共金尊

特に有名な前半部は、「ほかの花が散ってしまった後で、梅だけが小さな庭の情趣を独占している。まばらな梅の枝は澄んだ浅い水の上に斜めに影を落とし、ほのかな香りが朧な月明かりの中に漂う」というように訳せるでしょうか。まだ百花が眠る寒い時期に咲く梅の美しさ、清らかさが表現されています。この林逋の詩は、多くの人々に賛美されてきました。林逋と重なる時代に活躍した歐陽脩(1007~1072)は、第三・四句「疎影横斜水清浅／暗香浮動月黄昏」を絶賛する言葉を残しています(『帰田録』)。北宋時代を代表する文人の蘇軾(1037~1101)もまた高く評価しており(「評詩人写物」「和秦太虚梅花」)、南宋時代前期に活躍した周紫芝(1082~1155)は、この対句が二百年

たった今でも人々にもてはやされていると記しています(『竹坡詩話』)。梅は種類によっては豪華に咲き誇るものもありますが、この詩の梅の清楚なイメージに俗世を離れて隠棲する林逋のイメージも重なり、梅は文人・高士が愛すべき高潔な花として特別な存在になっていったと考えられます。

こうした文学上のイメージは絵画とも深く関わります。清時代の画家・汪士慎筆の「墨梅図」(大和文華館蔵、図1)のように、文人たちが好んで描いた水墨画には、梅を題材としたものが多く、しかも大地に根を張る堂々とした姿を描くのではなく、伸びやかな枝先を描くことが多いのは、林逋の詩をはじめとして蓄積されてきた楚々とした梅の枝のイメージが投影されているためと考えられます。また、道服・頭巾姿の人物が梅と共に描かれていれば、林逋を意味するなど、絵の中でも林逋と梅とは切っても切れない関係となっています。

林逋の他に、梅と共に描かれる詩人として挙げられるのが、盛唐に活躍した孟浩然(689~740)です。孟浩然が雪の中、梅を探しに驢馬に乗って出かけ、瀟橋(長安の東にある瀟水に架かる橋)で詩を詠じるといふ故事があり、この故事は中国や朝鮮半島で絵画の主題として好まれました。その作例の一つが、大和文華館蔵の「瀟橋尋梅図」(図2)です。粗めの画絹や、中国・明時代



図1

の浙派の影響が窺える粗放な筆遣いなどより、16世紀に朝鮮半島で描かれたと考えられています。ゴワゴワとした皴が幾重にも連なる主山や、その後ろの遠山は、上部を塗り残すことで雪が積もっていることを表しています。画面下方には驢馬に乗る孟浩然と連れの従者が描かれています。二人の背を丸めた姿勢や、周囲に刷かれた暗めの墨色より、冷たい空気が伝わってきます。驢馬は今まさに橋の上を渡ろうとしており、その先には小さな花をつけた梅の枝先が描かれています(図3)。

瀟橋尋梅の故事は広く知られているのですが、実は孟浩然の詩には、この故事の内容と合致するものが存在しません。やや近いものとして、晩唐の唐彦謙の「憶孟浩然」(孟浩然を憶ふ)という詩があり、「雪が晴れて驢馬に乗ると詩興が尽きない」という意味の句が含まれています。雪の中に驢馬に乗って詩作する孟浩然のイメージは北宋時代にも伝わっており、蘇軾の「贈写真何秀才」という詩には、孟浩然を描いた古画について「雪中騎驢孟浩然」(雪中驢に騎る孟浩然)と詠われています。ここではまだ瀟橋と梅は登場しないのですが、南宋時代の王庭珪の詩「贈写真徐濤」には、「徐濤が描いた孟浩然の絵の中から、瀟橋の風雪が起こるのを感じる」という意味の句があり、この頃には



図2

瀟橋が加わるようになります。これは、晩唐の宰相で詩人の鄭綮の故事が関係すると考えられています。鄭綮がある人から最近新しい詩はできたかと聞かれ、「詩興は瀟橋の風雪の中、驢馬の背に乗っているときに得るものだ、ここではどうして得られようか」と答えたという故事が『北夢瑣言』(北宋時代)・『全唐詩話』(南宋時代)などに掲載されており、孟浩然の雪中騎驢のイメージと重なるため、ここに登場する瀟橋も加わったのでしょう。続いて梅ですが、孟浩然が雪の中梅を尋ねるエピソードの早い例は、元時代の雜劇に見られることが指摘されています(参考:小松謙「杜甫遊春」の系譜—民間における杜甫像の形成—『中国文学報』83、2012年)。この時期にはすでに、梅は文人・高士の愛する花として特別な存在になっていたこともあり、雪の中に驢馬に乗って詩作したという風流で清貧な孟浩然と梅は結び付きやすかったのでしょう。先に挙げた蘇軾や王庭珪の詩は、孟浩然を題材とした絵に関するものであったように、宋・元・明時代には、孟浩然を題材とした絵画が多く描かれたことが題画詩などから分かっており、明時代以降は実物の絵画作例も残されています。絵においては、雪景色の中驢馬に乗る孟浩然の姿に加え、健気に咲く梅もあつた方が風情が増すこともあり、梅を添えるバージョンが好まれ、孟浩然の「瀟橋尋梅」という故事が広まる一助になったのではないかと推察されます。(宮崎もも)



図3 (図2部分)